



はやぶさ無事帰還！

小惑星探査機「はやぶさ」は6月13日午後11時21分（日本時間：午後10時51分）ごろ、オーストラリア南部の上空で大気圏に突入した。

「はやぶさ」は、大気圏突入の約3時間前にカプセルを分離して、ウーメラ砂漠にカプセルを落とし、約60億キロの旅を終えて7年ぶりに地球に帰還した。

カプセルに損傷はなく、18日未明に神奈川県相模原市のJAXA相模原キャンパスに運ばれた。

その後、X線検査でカプセルの中身を確認したところ、直径1ミリ以上の物質は見つからなかったが、JAXAによると、小惑星イトカワの試料は、採取に成功していたとしても、0.1～0.01ミリメートルほどの小さな粒子と推定されており、今

後カプセルとその内部の容器を開封して、中に入っている物質をかき出し、詳細に調べる予定。

専用装置で開封する予定で、試料の有無が最終的に分かるのは数カ月後になる見通しとのこと。

また、JAXAは「はやぶさ」による宇宙の旅を「世界最長」としてギネスの世界記録に申請した。

ギネス申請は（1）月以外の天体に着陸した初の探査機（2）帰還した探査機としての航行日数も2592日と世界最長、の2点。「はやぶさ」は彗星のちりを持ち帰ったアメリカ探査機「スターダスト」の2534日を更新した。

1カ月半で記録の対象になるか回答があり、数カ月間審査される。



(C) JAXA

カプセル画像



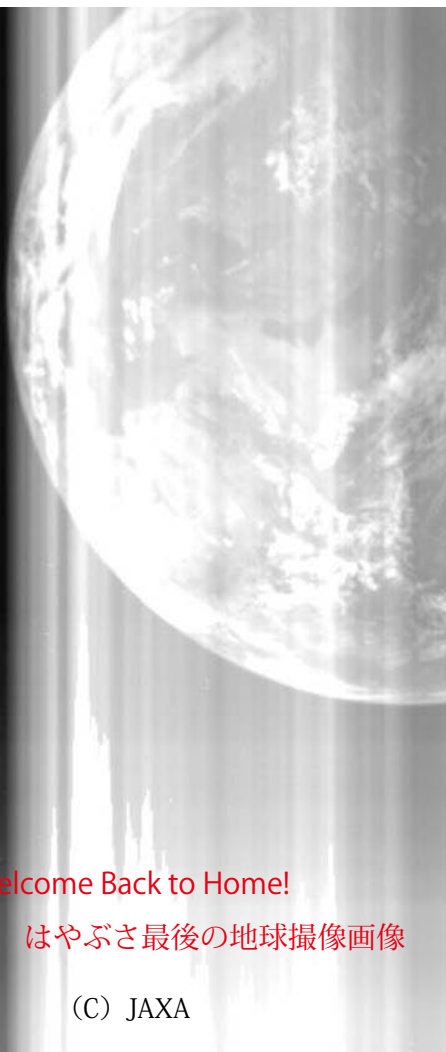
(C) JAXA

はやぶさ火球画像



(C) JAXA

「はやぶさ」が撮影した地球のカラー画像



Welcome Back to Home!

はやぶさ最後の地球撮像画像

(C) JAXA

「はやぶさ」の旅

2003年5月9日	鹿児島宇宙空間観測所（内之浦）より打上げ
2003年5月27日	イオンエンジン点火
2004年5月19日	地球スウィングバイでイトカワに向けて旅立つ
2005年7月29日	小惑星イトカワの撮影に成功
2005年9月12日	イトカワに到着（20km地点）
2005年9月30日	ホームポジション（約7km地点）到着
2005年11月12日	ミネルバ分離
2005年11月20日	1回目のタッチダウン・ターゲットマーカ放
2005年11月26日	2回目のタッチダウン
2005年12月8日	燃料漏れによって姿勢が安定せず、地球との通信ができなくなる
2006年1月26日	地上との通信が復活
2007年1月18日	資料容器のカプセル収納・蓋閉め運用完了
2007年2月	イオンエンジンの再点火
2007年4月25日	地球帰還に向けた本格巡航運転開始
2007年10月18日	第1期軌道変換完了・イオンエンジン停止
2008年5月末	地球から最遠に到達
2009年2月4日	第2期軌道変換開始・イオンエンジン再点火
2009年11月4日	イオンエンジンに異常発生
2009年11月19日	2台のイオンエンジンを組み合わせて推進力確保
2010年3月27日	第2期軌道変換完了・イオンエンジンの連続運転終了
2010年4月～6月	再突入に向けた軌道修正
2010年6月	地球帰還・カプセル回収

肝付町では。

「はやぶさ」が帰還を果たし、一夜明けた6月14日（月）に、肝付町地域女性団体連絡協議会では、「はやぶさ」をM-Vロケットで打ち上げた内之浦宇宙空間観測所を訪

れ、花束を贈って職員の労をねぎらいました。

また、肝付町宇宙空間観測協力会では、本所と支所に帰還を祝う懸垂幕を設置し、JAXAへ祝電を送りました。



肝付町役場本所懸垂幕



内之浦総合支所懸垂幕



女性団体連絡協議会から花束の贈呈



(C) JAXA

「はやぶさ帰還について」

はやぶさプロジェクトマネージャ 川口 淳一郎教授 かわぐち じゅんいちろう

内之浦にもどってこそ、
航海の終着ではないか・・・

はやぶさは、めいっばい背伸びをした計画だったこともあり、正直なところ果たしてどこまでできるかというプロジェクトでした。みなさんの応援をいただき、ここまでこれたと思います。

この成果は内之浦の方々とともに育んできた、宇宙研の成果を礎として成り立っているものであって、内之浦の方々、諸先輩方にも、ぜひお祝いを申し上げたいと思います。

「はやぶさ」が打ち上げられたのは、今は肝付町ですが、当時の内之浦町です。

2003年の5月9日に打ち上げられました。当時は、5月に打ち上げることは漁協さんの方々の想定の中になかったのですが、的川名誉教授らによりますと、この打ち上げ時期が、「はやぶさ」にとって動かすことができないと説明をさせていただいたところ、この計画のおそらくあまりに荒唐無稽な内容に驚かれたのかもしれないませんが、非常に寛大にこの打ち上げを認めていただいたようです。大変にありがたく思っています。当時は、実験場も宇宙研に帰属していましたが、同年の10月にJAXA

として組織変更が行われて、この「はやぶさ」は、宇宙研として打ち上げた最後の衛星（探査機）にあたります。



はやぶさ打ち上げの写真
(C) JAXA

内之浦の実験場は、我が国最初の人工衛星である「おおすみ」を打ち上げ、また「さきがけ」「すいせい」といった我が国初の惑星探査機を打ち上げた由緒ある特別な場所といえます。

世界初の地球以外天体からのサンプルリターンを目指して打ち上げられた「はやぶさ」の母港であることは、おおいに誇りに思っています。いただきたい点です。

あの小さな実験場から、あの小さなロケットで旅発てたことは、この意義のある宇宙開発がいかにして可能となったかを世界に発信している点で大変意義深いと思っています。M-Vロケットの模型と発射整備棟があるかぎり、このメツ

セージは永久に発信され続けられることでしょう。

大変なご理解をいただいて、いまま相模原にはM-Vの模型と、ホールには「はやぶさ」の模型が展示されています。町民のみなさまには、本当におおきな誇りと思っただけだと思います。

この希有な探査計画が、永年にわたり宇宙研の活動に理解をいただき、また支援をいただいた内之浦、肝付の方々のおかげであることも、われわれプロジェクトのメンバーは十分に認識しています。

皆さんと一緒に取り組んできましたので、皆さんが祝福されるべきだと感じています。ありがとうございます。

7年ぶりに対面したカプセルは、まるで新品のようでした。2007年に閉めたふたは、本当に閉まっていた良かったです。まるでタイムカプセルのようです。

私の夢の1つは、カプセルをもう一度M組み立て棟クリーンルームに持っていくことです。内之浦から飛び立ち、もう一度内之浦にもどってこそ、航海の終着ではないかと思うところです。



3月から連載してきた「はやぶさ帰還」の特集は、はやぶさの無事帰還とともに終わります。

私記や画像を提供してくださった川口淳一郎教授を始め宇宙航空研究開発機構の皆様にも厚くお礼申し上げます。

また、肝付町は次期固体ロケットの打ち上げが内之浦に決定することを願っております。